

電動車向け電池の 先端製造ラインに強み 生産システムで脱炭素社会の一翼を担う —長野オートメーション

長野オートメーション（長野県上田市、0268-42-6835）は、自動車業界を中心に、各種生産設備・自動化装置の設計・製作を手がけている。新しいシステムを提案する発想力、それを具体化する計算力、コストパフォーマンス意識を重視したモノづくりを展開している。特に乾電池から始めた電池の製造設備を強みとし、完成に至るまでの多様な工程を自動化する設計ノウハウは、ベテランから中堅、若手設計者へと引き継がれ、今では電動車向け電池の製造設備の構築に活かされ、他社との大きな差別化につながっている。

要望には常に120%で応える

同社の設立は1982年。自動車部品メーカーの生産技術部門で加工機や鋳造機の設計に携わっていた山浦誠司会長が独立し設計受託からスタートした。「専用機の中でも精度の要求が高く、長期にわたって精度維持が求められる加工機の設計思想が当社の根底にある。加工機以外の受注が多くなった現在もその設計思想は変わらず当社の特徴の一つになっている」と山浦会長は語る。設立以来、1万台以上の装置を設計・製作してきた。現在は生産ライン全体を構築する引き合いも多く、そのニーズに応えるため第6工場まで拡張している。

社員数は約180名で、そのうち設計部門は、機械設計者と電気設計者がそれぞれ約40名の体制。同じフロア内で両設計者が業務にあたり、担当者が相互に行き来しながらやり取りを行っている。同社が得意とする電池の生産ラインは、液体から薄いフィルム、粉

体、板金部品、加工部品を高速で貼合・溶接・かしめ・組立て・注入・画像検査を行う工程となり、幅広い設計の知見が必要となる。そのため、設計者には特定の工程を担う装置に限ることなく、さまざまな設計業務を担当させる。設計の過程では過去の実績や経験者のサポート、デザインレビューなどの検討・評価の場での議論を通して、ベテランから中堅、若手へと知見が引き継がれるようにしてきた。

同社には10年以上続いている行事がある。毎朝1人ずつ、設計者約80名を前にして、持ち回りでスピーチするのだ。当初はどのような話題でもよかったが、間もなくテーマを「過去の設計失敗談」に統一した。長くて10分ほどの持ち時間内で、ホワイトボードを使って失敗例と改善例を簡潔に説明し、質問も受け付ける。数年前からはその内容を記録に残し、別途参照できるようにした。

2015年に社長に就任した山浦研弥氏はスピーチの狙いについて、「まずはコミュニケーション能力の向上に向けて人前での発表に慣れること。



山浦誠司会長



山浦研弥社長



遠藤正浩取締役



平井健一取締役



戸奈雅樹営業部課長